

# あじえんだ113

第5号



## 《もくじ》

キーワード随想「鮎河」ふたたび	2
シンポジウム・総会	6
ツアー&ウォッチングレポート	8
上・下流交流事業	10
生きものたちの語る相模川 2	11
市民・事業者・行政のページ	12
相模川紀行	15



## 《キーワード随想》

# 『鮎河』 ふたたび

相模川は、太古の昔から暴れ川であり、それだけに生物多様性に富んだ川であった。とりわけアユの影の濃さは、『鮎河』の別名に残されているほどである。

この流れに再び、海から帰る香魚たちの姿をよみがえらせることができるのか——4人の方々に、鮎河への思いを綴っていただいた。

※掲載は順不同です。

写真提供 神奈川県内水面試験場

## アユのすむ川

岡崎 巧

**アユ**は年魚とも呼ばれ、1年でその一生を終える魚である。秋になると、成熟したアユは川を下り、産卵する。直径約1mmの卵は10日ほどでふ化し、仔魚は海に下って沿岸域でプランクトンを食べながら成長する。翌年の春、7~8cm程度の大きさにまで成長すると、川へ上り、石に付いた藻類を食べながら急速に成長する。6月のアユ**釣り**解禁の時期ともなると、盛んに「なわばり」を持つようになる。この「なわばり」を持つ習性を利用したのが友釣りで、季節の風物詩ともなっている。そして秋になって成熟したアユは、産卵した後、はかない一生を終えることとなる。

このようにアユは基本的に一生の間で、川と海をその生活場所として利用している種である。ところが、今日の多くの河川では、ダムや堰堤などにより流れが寸断されている現状にある。当然このような河川では、アユが子孫を残すことは不可能である。このことから、現在、天然のアユがいなくなった多くの河川では、盛

んにアユの種苗放流が行われている。ここで放流種苗として用いられるものは、その多くが、琵琶湖産の「コアユ」と呼ばれる、一生を淡水で過ごすタイプのアユである。これまで、この琵琶湖産アユはなわばりを強く持つ性質があることから、友釣りで釣るための種苗として高く評価されてきた。

ところがここ数年、全国的にアユの不漁が続いている。これは、琵琶湖産種苗を中心に「冷水病」という病気が流行していることが主たる原因と考えられている。また、近年、急激に生息数が増加しているカワウによる被害も、アユの不漁に拍車を掛けている。

漁協の組合員や釣り人の多くは「いい魚を放流しないから釣れない」という。それはそれで当然の理由ではあるが、本来ならば、アユという魚は「子供のころを海で過ごし、川に上って大人になる魚」である。また、昔はそうした天然のアユがたくさんいたはずだし、放流などせずともたくさん釣れたはずである。そのような本来の川の姿が忘れ去られようとしていることに対して、少々寂しい気持ちになるのは私だけではあるまい。

アユを取り巻く環境について、あまりよくな





## 相模川の漁業は蘇る

菊池 光男

いことを書いてきたが、少し希望の持てることもある。平成9年に河川法が大幅に改正され、これまでの、「利水」や「治水」といった人間主体の河川改修を目的としていたものに、「環境」という要素が取り入れられ、生物の視点に立った改修がなされようとしているほか、河川行政に住民意見を取り入れることも制度化された。

これらにともない、最近の河川改修では多自然型工法等が導入されるようになり、これまで申し訳程度に付いていた**魚道**も、まだ数は少ないものの、機能的なものが設置されるようになってきた。また、これらに関する研究も、種々の研究機関で行われるようになったことは喜ばしく思う。ただし、これらの分野に関する知見はまだ十分とは言えず、施工例も少ないのが現状である。

本来の川の姿を知っている人がいるうちに、これらの人の意見や本協議会による取り組みの成果等が反映され、川が本来の川に復元されることと、現状ではなく、より本来のものに近い河川環境が次世代に受け継がれていくことを期待するとともに、私自身も水産行政・研究に携わる人間として（水の中からの視点から）努力して行きたいと考えている。

(山梨県農政部花き農産課)



白く波だっている川の瀬がアユの産卵場（水道橋の下流・相模川）

相模川の漁業に影響を与えた水資源開発は、昭和20年代に相模川河水統制事業による日本最初の人造湖相模ダムが建設されたことに始まります。その後、昭和30年代後半の相模川総合開発事業による城山ダムおよび寒川取水堰の建設、昭和40年代後半の相模川高度利用事業計画などが次々と実施されました。

この高度利用事業は、1年のうち3分の1は寒川取水堰下流に一滴の水も流れない「全量取水」という計画で、相模川魚連をはじめ、管理組合である第二漁協は大変な反対運動を行いました。当時、600万県民のためにはやむなしとして同意せざるを得ませんでした。

一方、昭和30年代の砂利採取による河川荒廃はすさまじいもので、魚の棲み場を奪うとともに、漁場の中心である**鮎**の産卵場に壊滅的な打撃を与え、この時期は漁師が川にいても鮎の姿を見ることの出来ない日が続きました。

しかし幸いなことに、漁獲量では昭和40年代の年100トン程度から、60年代以降は350～400トン程度に3～4倍増しており、平成8年の農林水産統計では1位那賀川、2位天竜川に次いで、相模川は500トンで第3位にランクされています。

平成11年鮎産卵期には宮が瀬ダム完成に伴う河川流下量の増加によって、それまで寒川取水堰まで毎秒13トン流下量があり、取水堰で毎秒12トン取水され残りの1トンが相模湾に流下されていましたが、左岸に**魚道**を増設されると共に毎秒8トンを海に流下されるという、産卵期の鮎に対して最高の条件が整いました。上流で孵化された5mgほどの仔鮎には、明るいうちに集まる習性があります。寒川堰の右岸（取水口の対岸）に野球のナイターが出来るほどの照明を設けた企業庁の心づかいで、か細い



鮎の**生命**を数多く海に送り出して頂きました。鮎は1000尾に1尾の回帰率ですので、それなりの努力が必要です。

このように相模川の漁業は、河川環境が悪いとはいえ、漁獲量の面から申せばよくなってきております。このことは、かつての漁業が単に採るだけの漁業であったものから、「作る・育てる・採る」という、管理型漁業へと転換をはかり、実施に移されてきたことが大きな成果をあげたものといえるでしょう。相模川の鮎は、まさに私どもが育ててきた結果として現在の姿があると自負いたしております。

現在、相模川にどのくらいの鮎が遡上してくるかと申しますと、年変動が大きく一千万尾遡上した年もあれば、わずか一万尾という年もあります。これでは資源確保や漁場の管理が出来ないのが実状です。相模川魚連では毎年3百万尾から4百万尾程度の稚鮎を放流しております。海産稚鮎は不安定なため、少ない年にはこの人工種苗鮎が主力となっています。

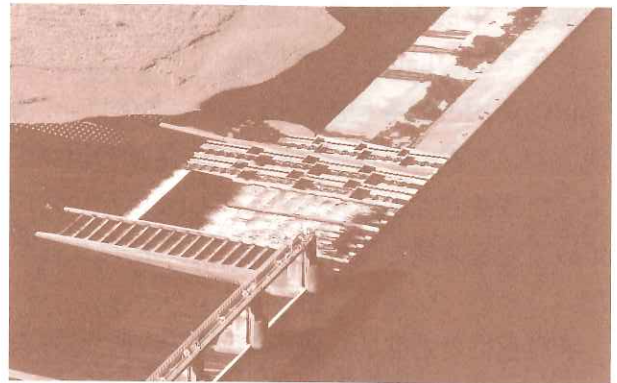
放流された鮎は、解禁1ヶ月で50%から60%近く漁獲されることが報告されています。そこで、状況を見ながら追加放流（多回放流）を実施しており、放流に当たっては鮎に標識をつけるなど採捕調査結果を参考に、細かな放流を実施しています。このため魚連では、蓄養池において放流時期に適した鮎の育成に取り組んでいます。

近年、漁獲量の増加は、標識鮎放流試験の積み重ねによる資源量の把握、適切な放流を行うための蓄養池の有効利用、育成技術の向上、適切な漁場管理など総合的な事業の推進によるところが大きいものとして考えております。

ことに余暇時間の増大や親水性志向の高まりを背景として、水産資源を活用した遊漁の場や、憩いの場など河川に対するレクリエーションの場としての需要が急速に高まってきております。このため、よく釣れる漁場を作ることはもとより、家族連れで楽しめる特設釣場の設定、魚のつかみ取り、河川の周年利用化などについ

ても沿川市町村と連携を強め、取り組んでいかなばなりません。今後も組合員の皆様の漁場を次の世代に喜んでいただける漁場として残していくために、努力を続けてゆきたいと考えております。

（相模川漁業協同組合連合会代表理事長）



中央にある階段の脇に新しい魚道が完成した（寒川取水堰・相模川）

## 消えた釣り場

高木 弘

相模湖上流部の上野原町島田地区。毎年鮎の解禁日になると、桂川橋の上下はたくさんの釣り人であふれかえる。しかし、5年ほど前から変化がおこりはじめた。

それまで桂川本流は、支流鶴川、松留の東京電力放流口から放水される水量と併せて、桂川橋の上流から下流にかけて滔々たる流れをつくりあげていた。川の左右に乱立する釣り師たち釣竿が、毎年の風物詩ともなっていた。

ところが相模湖が砂に埋まり、河床が表われるようになり、その川の流れが年々細くなってきているのだ。“鮎は瀬につく”といわれるように、流れのあるところに生息する。当然のことながら釣り場はせばめられ、釣り人は少なくなる。

毎年、くり返される浚渫工事のあとに造られた堤防工事はコンクリート張りで、親水性にはなんらの配慮もされていない。2年前にこの護岸が完成してからは、川の流れはほとんどなく



なり、桂川、鶴川の合流部の下にわずかの流れが残っているだけで、現在では湖の一部に姿をかえてしまったのだ。護岸工事の終わった堤防にいる釣り人は、バス釣りや鯉のぶっ込み釣りの人々に変わってしまった。

相模川に津久井湖、相模湖が造られてから現在にいたるまで、山梨県漁業協同組合に毎年百万尾の鮎を補償している。その鮎たちの多くは釣られないまま湖の底に沈んでいく。落ち鮎の季節がまたやってくるが、古くからの釣師は嘆く。「もう鮎のうるかも食えなくなるなあ!!」

春になると中央高速上野原インターの出口には「鮎おどる桂川」のポスターが飾られる。

清く、豊かに、川は流れる。いつかもう一度、消えた釣り場だけではなく、天然の鮎が再び桂川に上ること実現させる壮大なるロマンを夢見ている。

——上野原老釣人  
(上野原町・市民)



桂川橋上流の釣り人（桂川）

## 桂川・相模川のアユ受難

小西 一郎

春早く、暖かい日に群れをなして稚アユが川を遡ってくる。夏、若アユは川底の石の表面に生える珪藻を食べ大きく成長する。秋には落アユとなり、産卵のため河口に近い所までくだる。そこで産卵を終えた親アユは直ちにその一生を終える。卵から孵化した仔魚は海まで流れ下り、冬の間、沿岸で動物プランクトンを食べて稚アユにまで成長する。このようにアユは、一生を

1年で繰り返すため「年魚」とも呼ばれる。

桂川・相模川は、かつては鮎河と呼ばれてきた。道志川の「鼻まがり鮎」は将軍家献上として有名であった。相模湾で育った稚アユは、琵琶湖産コアユに次ぐ生産量を示し、河川放流用および池中養殖用の種苗として重要な役割を果たしてきた。

このように過去形でしか語れない豊饒なりしころの相模川のアユの受難は、明治の終わりごろ桂川での発電による急激な水位の変動、水路式発電ゆえの枯れ川として始まった。下って1942年には、相模ダム（相模湖）が本流をせき止め、道志川も道志ダム（奥相模湖）が1953年にせき止めてしまった。相模湾からのアユが遠く都留にまで遡上していくことはなくなった。

第2次世界大戦後の復興と東京オリンピックに向かう過程での砂利採取による相模川の荒廃はまさに目を覆うばかりであった。この間には農業用水の堰堤である磯部頭首工や小沢頭首工も大きく改築をされている。さらに1964年には城山ダム（津久井湖）が下流の寒川取水堰とワンセットとなって、またも本流を分断する。この寒川堰はさらに当初の50mの魚道を10mに縮め、下流の河川維持用水全量を取水する高度利用事業の時代は、1999年3月末まで続いたのである。

河川流量の減少と急激な水位の変動、水質の汚濁、そしてダム、堰堤などによるいろいろな悪影響。桂川・相模川の現代史とはまさにアユにとってはその生息環境を潰されてきた歴史である。川にすむ多くのいのちの存在を顧みず、人間の都合だけを考えていろいろと川をいじり回して、魚道をもって「最善の策である」等とうそぶくが、アユにとっては堰堤など、ないに越したことはないのである。

流域協議会は、これらの実態にメスを入れ、若アユ躍る桂川・相模川の回復に努めるような場にしていきたい。

(相模原市・市民)



# 桂川・相模川の水をきれいにするために ～石けんと合成洗剤を例として～

## 流域シンポジウム開かれる

2000年3月5日（土）に都留市文化会館で流域シンポジウムが開催されました。

主催者あいさつのあと、都留市における行政・市民の環境保全に関する活動報告、石けん・洗剤各メーカーからの話題提供がありました。

午後は、デモンストレーション「石けん売りの口上」ではじまり、パネルディスカッション・フロアー討議で問題意識を深め、最後に行動宣言を採択し、閉会しました。

また、ロビーには、流域各団体の活動状況がパネルで展示され、出席者の関心をあつめていました。

## 川への思い

清水 絹代

今回「桂川・相模川流域シンポジウム」が、都留市で開催されましたことに、大変感慨深いものがあります。市民のほんのささやかな集まりの「つるの環境を守る会」から「桂川をきれいにする会」が発足し、さらに県外のグループとドッキングして活動が広がり、同時に桂川・相模川流域協議会の発足から関わり、今日まで都留の環境に関わる様々な活動をコツコツ続けて来ました。

その間、環境に関わるグループも少しずつ増え、市民委員会としての「桂川をきれいにする会」と「つるの生活環境を考える会」への発展となり、ようやく市民権を得た感があります。

今回それらの運動の一端を報告させていただく事ができ、少なからず上流部の責任を担った活動をささやかながら続けていることを知っていただけたことと、手前みそながら満足しております。特に行政と市民の関わりの中で、数年前まで意識の大きな格差があり、歯がゆい思いがありました。しかし、行政の意識も次第に市民と近くなり、「共に学び、共に行動する」理想的な形となってきました。その成果として、罰則付き「まちをきれいにする条例」へと繋がり、市民意識の向上を期待するところです。

この美しい水と緑に囲まれながら、余りにも環境への配慮のない生活ゆえのゴミの散乱は、悲しい限りです。かつて、桂川は生活と密着し、夏は川遊びの子供たちの声が響き渡っていました。あ



石けん売りの口上に聞き入る参加者たち

の美しい川を取り戻したい、その思いで活動を続けて来ましたが、その桂川の汚れが、やがて相模川となり、下流域に様々な形で影響することを知ったのは、流域協議会の活動を通してでした。支流の川底に見られたバイカモの白い花も近年見られなくなり、濁りのひどさもBODの高さに出ています。その汚染源の多くが、工場の排水や家庭雑排水であることを考えるとき、今回のせっけん講演は大変インパクトのある、重要な課題が含まれており、もっと多くの上流部住民に知ってほしかったと感じました。機会があれば何らかの形で市民にお知らせしたいと思います。また、下水道供用が二十年後の当地の計画の中「合併処理浄化槽推進」の声を上げて来ましたが、早急の浄化のために重要な問題であると考えています。流域協議会の様々な活動に残念ながら、山梨からの参加者が少ないことは、「環境・水」への思いが切実ではないせいでしょうか。一地域の問題ではなく、地球的な問題としてとらえ、行動していくことが、地球を守り、健やかな命を次に繋げることだと考えております。

(桂川をきれいにする会・都留の生活環境を考える会)



## 「つくる」から「動かす」へ

= 定期総会に参加して =

柿澤 宏昭

これまで、研究者の立場から桂川・相模川の流域保全活動を見させていただけでしたが、今回総会に始めて参加させていただきました。

今回感じたのは、協議会も混沌とした中から組織を立ち上げる時期から、実際に動かしていく時期に入ってきたことです。基本理念が合意され、さらに行動指針・行動計画が次第に詰められていくなかで、協議会の基礎が固められつつあるように思います。一方、総会の議論を聞いていて、動かしていくために二つの課題の解決が迫られているように思いました。

一つは運営体制の課題です。立ち上げるための体制から、持続的に協議会を動かしていくための運営体制をどのようにつくっていくかが問われているように思われます。部会・事務局の役割、部会間の相互公開などについて出された意見はこの点に関わるものです。相互の信頼関係の形成にはできる限り「ブラックボックス」をつくらないことが重要ですが、このことは行政の仕事のやり方自体を変えることも要求してきます。また、幅広い参加を得るということと、詰めた議論をして合意をするということの間のギャップをどう埋めるかが、ますます大きな課題となってきます。

もう一つの課題は、協議会は今から何をして行くのかということです。膨大な行動計画・指針のすべての実行やモニタリングに協議会が関わるということは、現実的ではありません。協議会が基本方針の設定・全体の調整を行うとともに大きな問題に取り組み、具体的な活動は、構成員それぞれの持ち場での日常活動に組み込まれていることが、理想的な姿かと思います。ただ、すぐにはこうした形態をつくることできない以上、パイロット的な事業を協議会ではじめたり、自治体の既存の政策にリンクさせていくようなことが必要のように思われます。

いずれにせよ、これだけ多様な関係者が集まって意思形成をしながら流域保全を行っていくというのは、全国のなかで先進的なだけでなく、世界的にみても先進的な試みです。そしてそれは協議会のなかで完結するようなものではなく、私たちのこれまでの行動様式自体——生活も仕事も含めて——を変えていくことを求めています。それだけにお手本はなく、むしろ協議会の日々の活動が、次世代の環境保全の指針を創りつつあるのだと思います。

(北海道大学農学部助教授)

## 桂川・相模川流域協議会 2000年度定期総会が開催される

2000年5月20日（土）に相模湖交流センターにおいて、2000（平成12）年度の定期総会が開催されました。

議事に先立ち、昨年度実施した「環境ホルモンの影響調査」の中間報告がありました。

議事では、昨年度の事業・決算報告が承認された後、今年度の事業計画・予算案が検討され、新たな事業として「流域ツアー＆ウォッチング」、「ホームページ開設事業」が採択されました。

さらに、専門部会で検討を重ねてきた「アジェンダ21桂川・相模川」の行動指針、行動計画について、合意できる課題について採択され、市民・事業者・行政の三者による活動が、また一歩前進しました。





# 相模川(桂川)中流地域の清流を歩く

守屋 千尋



JR中央線藤野駅①のホームに立つ。見渡す限り山また山である。すぐ北側の山に、中央自動車道がへばり付くように走っている。駅前広場にでる。目の前に甲州街道が走り、その向こうは崖である。わずか数10m幅の平台地がこの地域の生活の場、

生産の場である。

街道を越え、断崖を滑るように敷設された道路を下る。大きなアーチ型の鉄橋が目飛び込んできた。「弁天橋」②であり、その下が相模川である。川は淀んでいるがごとく、流れているがごとく、深遠な風情を醸しだしている。両岸は河岸段丘がそそり立っている。今渡った甲州街道は、はるか上を走っている。水面から50cmばかり岩肌が露出している。普通なら川面はそこまでであるという。水深は10mぐらいだという。

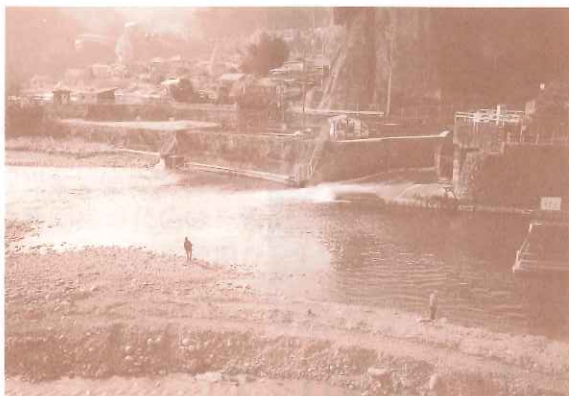
橋を渡ってまた、急崖を斜めに走る道を登る。広い台地に出る。中央にやや広い道が走っている。俗にいう「小田原街道」である。むかし騎馬が疾走し、農民がおびえている姿が頭を横切る。対岸にも「旧鎌倉裏街道」があり、砂塵が森の中を渦巻いていただろう。



番号①～⑩は本文参照



東京電力松留発電所の放水路付近



「名倉・太刀」③という集落が目の前にある。地名からいっても歴史を物語っている。家も重厚で、豪邸が多い。道筋にある墓地には、江戸時代の元号を刻んだ墓も多い。自動車も1台か2台しか通らない静寂そのものである。「芸術の里」の看板が目に見える。戦後多くの文人墨客がこの地を愛し移り住み、数々の芸術品を作成した。今でも続けられ、山1つ、川1つの全域が芸術地域となっている。そのうえ名物「栗」林も保存され、芸術に花を添えている。

名倉集落の西端から道は大きくカーブし、下り坂になり、相模川になる。「境川大橋」④アーチ型の鉄橋である。多くの人が橋の上から釣り糸を垂らしていた。橋の上流を見て足が止まった。山と山の間を、大河が流れている感じである。悠々たる態度である。暫し眺めていた。

下流100mぐらいに、境川の合流点が小さく見える。「ここより甲州。鮎安し。茶屋三軒あり。中の店で休む」と江戸時代の文豪が書いている。僅かな字数であるが、この土地の自然と生活が頭に浮かぶようである。

前方にループ状の道路が見える。その道をのぼり「諏訪関所跡」⑤を通過してまた相模河畔に立つ。堤防上に桜並木がある。春になったら美しい景色だろうと想像する。川は川でも、地元の人「島田湖」⑥と呼んでいる。昔は水田があり、その灌漑用水路で鯉や鮒を手掴みにして遊んだところだった。いつの間にか水田はなくなり、今のようになった。

「桂川大橋」⑦昔から重要な橋だった。(川はこの付近から桂川と呼ぶようになっている)特に上野原宿の「市」に行く人の通路であり、鉄道時代になれば木材等の重材料を駅に選ぶ道でもあった。

桂川の北岸を「巖島橋」⑧まで歩く。松留発電所からの放水が勢いよく流れている。桂川の水も鶴川の水も影が薄い。発電所はここから上流に7つある。発電用水は時々川に流されるが、ほとんど導水路を通っている。

河岸段丘の平台地を歩き、上野原駅⑨から四方津駅⑩まで電車に乗る。わずか数分だったが、何かホッとさせる。駅から川に行くまで、また段丘崖の道を下りる。「川合橋」⑪につきあたる。橋の上下流の両岸は、今までと違った風情である。

水はピチピチ生きているように、断崖にぶつかっては散り、散ってはぶつかりながら川底を洗っている。川幅は2.30m、絶壁の高さは3.40m、みな緑に覆われている。川底は洗われているため、岩盤が黒っぽいい茶色をして浮いている。上流は狭められて山深く、下流は大きな瀬をつくっている。水は多くない。人々は「四方津溪谷」と呼んでいる。

さらに直接清流に触れようと下流に向かう。途中落ち葉が敷きつめられたような小道を下りる。河畔に出た。砂利が一杯ある河原である。水は音を立てて崖に石にぶつかり、清楚な色をつけて太陽の光に映えながら下流に向かう。川底の砂利は、黄色あり、茶色あり、桃色あり、さまざまな形して、崖の草木や天の青さを黙って見ている。安堵な空気が周辺に漂っている。

川と山と空が一体となった相模川・桂川の清々しい溪流を、わずかの時間で歩いた。上流は溶岩台を流れる荒々しい様相をみせる。下流は平地河川で悠々たる様相をしている。またいつか、ゆっくりと歩きたい川でもある。

(上野原町・市民)



## <上・下流交流事業>



### 快晴の植林作業！

小松澤 靖

平成12年4月22日、快晴の中、山梨県大月市笹子町において、神奈川県側から約160人、山梨県側から約60人が参加し植林作業体験事業が実施されました。

植林した場所は笹子川支流の上部にあたり、水源を保全する能力が高い森林を造成することを目的として、コナラの苗木約4000本を植えました。この本数は、2001年に山梨県で開催される「第52回全国植樹祭」に向けて行っている「21万本植樹」にカウントされています。

作業後にご協力いただいたアンケートでは「きつかった」というような感想が多く寄せられましたが、森林を造りあげる大変さ、自然の力の大きさを感じられたのではないのでしょうか。

今年も笹一酒造（株）さんから、自社の井戸で汲み上げた醸造用の湧き水を提供していただきましたが、この美味しい水も豊かな森林のおかげだと感じた方も多いかと思います。

苗木たちにとって、この夏を越すことが、生まれて初めての試練になるはずです。なんとか無事に乗り切って、将来、立派な森林になって欲しいものです。

午後は東京電力さんからのご協力で、東山梨発電所の説明を受け、電気の大切さを改めて教えていただきました。その後、ヒラタケを丸太に植菌する作業をしました。菌を上手にまわすことができたところでは、すでに土に埋めていることと思います。秋に立派なきのこが採れるといいですね。

最後になりましたが、この事業を実施するにあたり多大なご協力をいただいた大月市笹子町の皆さんに厚くお礼申し上げます。

(事務局・山梨県)

### 植林に参加して

白岩 央亘

4月22日（土）ぼくは地球探検隊の仲間といっしょに植林に参加しました。

本厚木駅からバスで二時間かけて、山梨県大月市というところまで行きました。

バスを降りてしばらく歩くと、すごく急な斜面のところに着きました。

ぼくは、お友だちとペアになって、お友だちがクワで土を掘り起こし、ぼくがコナラの苗をおいて、回りの土をかき集めて手でポンポンと軽くたたき、苗木の枝に赤いリボンをキュッキュッと結びました。

ぼくも少しだけクワを使ってみただけですが、ぼくがやっていた作業の方が楽だと思いました。クワはおばあちゃんの畑に行ったときに持ったことがあるけど、畑とちがって木の根っこや竹が出ていてすごく大変でした。疲れたけど楽しかったです。

お父さんも子どものころ、おじいちゃんと一緒に植林をしたことがあるそうです。でも、植えたのはコナラじゃなくて杉でした。今、その杉は40年以上もたって大人の木になりました。コナラは何年で大人の木になるのかな？

お弁当を食べた後、変電所に行って丸太にヒラタケの菌を植えました。ぼくが植えたのは直径が15センチぐらいのとびきり太い丸太だったけど、帰りのバスの中でふざけていたら、2本の丸太の合わせ目がはずれてしまいました。家に帰ってすぐ、お父さんといっしょにガムテープとヒモで直しました。ぼくの家を流れている相模川と、植林をした近くの川が、ずーっとつながっているって聞いて地図で見たけど、なんだか不思議な気がしました。

(厚木市 小4)



## カワラバッタvs.カワラスズ

浜口 哲一

**カワラバッタ**：石の間でチャリチャリ鳴いているのは誰だ。さっぱり姿が見えないぞ。

**カワラスズ**：小さな体ですいませんね、そういうカワラバッタさんだって、どこにいるかわからないじゃないですか。

**カワラバッタ**：我が輩は保護色、石にそっくりの色をしているからね。

**カワラスズ**：それにしても、すっかりご無沙汰でしたね。

**カワラバッタ**：そうそう、実のところ、相模川では仲間がすっかり減ってしまって、いざさか落ち込んでいるのさ。嫁さんを探すのも一苦労だし。

**カワラスズ**：そう言えば、一昔前までは、石がごろごろして、草がまばらに生えている、そんな河原や中州があちこちにありましたものね。一日中、そこに響く僕らの歌声、思い出すなあ。

**カワラバッタ**：人間から見ると、そんな川原は何の役にも立っていない荒れ地に見えるんだね。無駄だから活用しろというわけで、グラウンドや駐車場になってしまった。

**カワラスズ**：20年くらい前から、川原に車を乗り入れる人も急に増えたんですよ。車に踏まれると石が土にめりこみ、すき間がなくなるので、虫には暮らしにくくなります。でもね、僕らの勢力はあまり変わっていないんですよ、他にいい住み場所を見つけたんでね。

**カワラバッタ**：それは耳寄りな話だね、ぜひ聞かせてくれないか。

**カワラスズ**：話してもいいですけど、バッタさん

が住むのは難しいですよ。なにしろ、電車の線路なんですから。

**カワラバッタ**：ええ！線路だって？ そんな所に住めるわけないだろう。

**カワラスズ**：相模線でも小田急線でも、電車を待っている間に、線路の方に耳を澄ませてみてください。秋だったら必ず僕らの声が聞えますよ。川原に似た環境の線路への進出、いわゆる適応ってやつですかね。そのくらいしぶとくないと、この世の中、生きていけませんよ。

**カワラバッタ**：いやあ、カワラスズ君たちが小さな体の割にはたくましいのにはびっくりだ。といってもね、我が輩みたいに自然の川原でないと生きていけない仲間も大勢いるんだ。カワラノギクさんやカワラニガナさんのような花たちだってね。

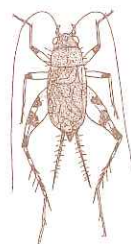
**カワラスズ**：もちろん、川原をだいじにすることは大賛成ですよ。車の入らない、広い中州や川原があれば、コアジサシさんとかチドリさんたちも巣を作れますしね。

## 出席者のプロフィール

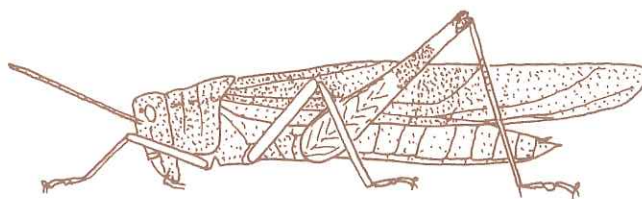
**カワラバッタ**ノバッタ科の昆虫で、後ろ翅の付け根が青いのが特徴。川原の砂礫地にだけ生息する。相模川・酒匂川での減少が目立ち、県のレッドリストで絶滅危惧種。

**カワラスズ**ノコオロギ科の昆虫で、川原の砂礫地のほか、鉄道線路や三保ダムのようなロックフィルダムにも生息する。昼も夜も、チャリチャリ…と澄んだ声でよく鳴く。

(平塚市博物館学芸員)



カワラスズ



カワラバッタ



## アジェンダ小噺

小宮 昇

落語に「大山詣り」というのがある。

長屋の衆が恒例の大山詣りに、今年も吉兵衛さんに先達（リーダー）を頼みに行くと、吉兵衛さんは二つの条件を出した。

「帰りに決まって喧嘩をおっぱじめる、困るんだなあ、何があっても腹を立てちゃあいけねえ。腹を立てた奴は二分の罰金、先に手を出した奴は坊主にする。いいかい」

一行十八人、大山街道を厚木に出て、大山釈尊に参詣。下向は伊勢原から東海道を藤沢泊まり、江ノ島、鎌倉を見物して、最後の泊まりが神奈川宿。ここまでは無事だった。明日はいよいよ江戸という神奈川宿で、酒癖の悪い熊公がくらい酔って、風呂場で大喧嘩、あげくが前後不覚に寝てしまった。

殴られた奴はおさまらない。申し合わせて、先達の内緒で宿の剃刀を借り、熊公を坊主にして、翌朝寝ているうちに発ってしまった。目が覚めて坊主頭に気づいた熊公、「ヨウシ、覚えてろ！」と手拭で頭を包み、早籠のたれをおろして一足先に江戸へ帰ると、長屋のかかあどもを呼び集めた。「一人で帰ったのはほかじゃない。金沢八景から船を出したが、野島崎沖で突然の嵐に船は転覆。一行十七人ことごとく溺死して、熊公一人が辛くも命を助かった。この上は、皆の後生を弔うため、おらあ、高野山へ登るつもり。この通りだ」と手拭を取って、坊主頭を見せた。

もはや疑う余地はなく、かかあどもは泣き出した。「皆も尼になってくれ。俺と一緒に諸国巡礼の旅に出よう」

かかあ一同、丸坊主にして泣く泣く百万遍をくっているところへ、一行が陽気に帰って来た。

幽霊だと騒ぐ坊主頭のかかあを見て、亭主たちはビックリ仰天。熊公せせら笑って、「腹あ立てるな、立てると二分だぞ」

「なにお！この野郎！」

袋叩きだと息巻く長屋の衆の前へ、先達の吉兵衛さんが割って入り「まあまあ待った。まずはお毛が（怪我）なくて何より目出度い」

オチは、旅帰りの挨拶である慣用句を利かせたのである。

以上、“落語のみなもと”宇井無愁著より引用した大山詣りであります。ご存知の通り、桂川・相模川の源流の一つの大山を題材にした落語で、「必ずオチの付いた話」から落語が成り立っていると言われています。落語では、ハナシを「咄」としたり、「噺」とも表わしています。現代では「話」で統一されたようですが、いずれも口や舌を付け、口から出たり、口から新しいものが出ることを意味しているようです。話は「言葉をも舌にのせまくる」ので話かと思えます。

さて流域協議会のアジェンダに口や舌を付けたら、どのようなオチになるのでしょうか。皆さんお考え下さい。

(平塚市・市民)

### —専門部会で学習会— 流域にふさわしい排水処理を考える

第2回と3回の専門部会・学習会は大月市市民会館にて、上記テーマで各約70名が参加し開催されました。4月29日の第2回目は、建設省下水道事業調整官の栗原秀人さんに下水道の仕組みや役割について講演いただき、市民による意見発表と活発な意見交換がなされ、地域の特性にふさわしい様々な排水処理を考える必要性を学びました。

7月25日には一般にはあまり知られていない合併処理浄化槽の仕組みについて「理想の高性能合併処理浄化槽を求めて」と題して菅原元彦さん（環境夢工房代表）、厚生省環境整備課浄化槽対策室長補佐の熊谷和哉さんには浄化槽法や助成制度等、「地域と連携して進める合併処理浄化槽の普及」について講演いただきました。また厚木市と平塚市が合併処理浄化槽の普及に取り組んでいる事例報告がありました。

今回は会員以外の市民も参加し、流域の自治体の担当者が多数出席しました。今後への取り組みが期待されます。



## 水とせっけん

三木 晴雄

私たちの身体は、成人で60～70%が水。体重60kgの人は約40kgが水です。生き物は水でできており、その影響を全面的に受けているとって過言ではありません。

水がなければ3日と生きていけないのに、水をないがしろにしてきた歴史が戦後の日本でした。日本は地表水に依存しており、そのため鉱物はあまり溶けこまず、いくぶんか有機物を含みやすいといえます。つまり、生活排水などで容易に汚染されやすいのです。

山にふった雨は急流となって短時間で海に注ぎ、無機物が溶けこまないのが、一般に軟水です。私は「水の良い日本にはせっけんが良い」ということを半ば信念としてきました。

温泉や海岸地帯などを除いて、外国のように硬度200というような地域はまれで、せっけんカスができる使用できないほどではありません。肌や環境にやさしいせっけんをぜひ、使い続けていただきたいのです。

それは、一私企業の存続のためのエゴでなく、理念としてそうあるべきだと考えています。その思いから、当社は合成洗剤をカットし、せっけん中心の経営をしてきました。108年の歴史あるせっけんメーカーとして、詰替用を最も早く導入して、ゴミ問題にも着目してきましたが、一貫して追求しているのは水。水とせっけんが私たちのテーマです。

さて、水とせっけんの関係について。汚れを落とすのはせっけんだと思っている方が多いのですが、水が正解。その証拠に乾いたせっけんをこすりつけても、汚れは全く落ちません。

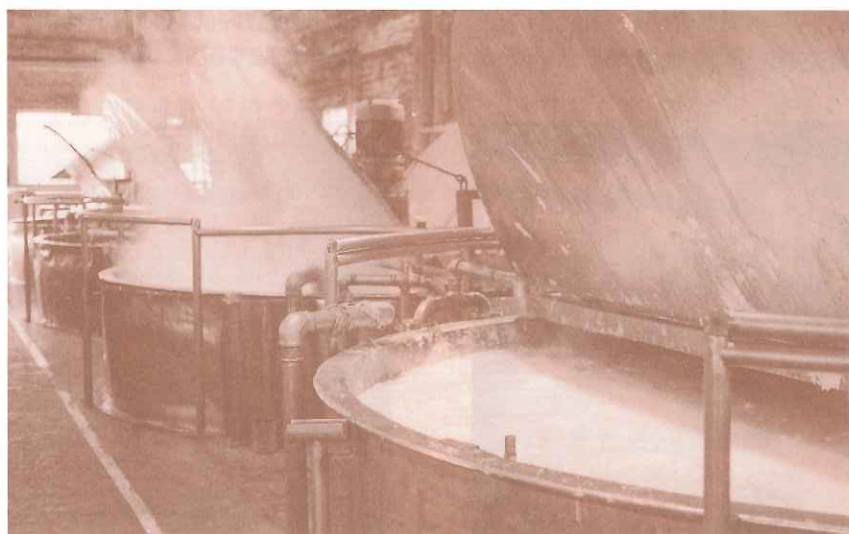
水はきわめてよい溶剤で、多くの物質を溶かします。“溶かす”と一言にいいますが、ミネラルウォーターのカルシウムやマグネシウム、海水の塩分、人や環境に有害な物質まで、みんな水の中に見かけ上は見えなくなっているわけで、これはよく考えれば、まことに不思議な水の性質なのです。

ただ、水に溶けないのが油。皮脂や食べ物汚れなどは油性で、水をはじき、混じり合おうとしません。せっけんは水の表面張力を下げて浸透力を高め、ものの表面をぬれやすくし、油の分子を乳化～分散して溶けた状態にします。せっけんは水の改質剤なのです。

また、排水は水中の微生物が生命活動に取りこむことで、つまり食べることで、最終的には水と二酸化炭素に分解されます。せっけんはこの生分解性が一番速いので、環境中に長く留まって環境を汚すことがありません。

水の働きを助け、環境の自浄作用を助けていくせっけん。せっけんには使いづらい面もありますが、きれいな河川を取り戻すため、ぜひせっけんを使っていただきたいものです。

(ミヨシ株式会社社長)



伝統製法による化粧せっけんのケン化釜。直径4m、深さ4m。



## 只今、平塚市馬入地区で“水辺の楽校”づくり実施中！

山田 政雄

近年、家庭や地域社会を取り巻く社会環境及びライフスタイルの変化に伴い、子供たちにとって自然とのふれあいを通した遊びや生活体験などの機会が、少なくなっている状態にあります。このため、学校教育をめぐる現場では、2002年度から実施される完全学校週5日制の下、ゆとりの中で一人ひとりの子供たちに、いわゆる「生きる力」を育成することを基本的なねらいとした総合的学習の取り組みが進められています。

一方、身近に存在している河川は、人々の感受性や情緒などを育む自然環境教育実践の場として優れたものであり、この河川を子供たちの身近な遊び場、自然体験の場として提供し、河川における子供たちの体験活動の充実を図るため、建設省では「水辺の楽校プロジェクト」を平成8年度から進めています。

この相模川でも、市民団体など関係者の方々の熱い思いが実り、平塚市馬入地区（右岸3km地点付近）を対象として、平成12年4月28日に「平塚市水辺の楽校推進協議会」が正式に発足し、現在、関係団体の方々が中心となって「平塚市水辺の楽校」の計画づくりが実施されているところです。

具体的には、地元自治会、地元小学校など学校関係者、地元関係市民団体、学識経験者（浜口先生）、平塚市、河川管理者の建設省ほかの参加で、これまでに準備会と推進協議会ならびにその下部組織であるワーキンググループの会議も併せて、計6回ほど開催されています。

会議は、各団体からの意見や構想、考え方など様々な観点から提案され、それを出席者公開の場

で十分に議論し、望ましい姿を模索して行く手法がとられています。

これまでに、現地の自然環境を把握し、ソフト面が中心となる「水辺の楽校プロジェクト」の方向性、整備の方向性、運営方針等について審議がされて、

- プロジェクトの基本的な方向性として、「水辺の楽校は、人々が自己責任のもとで、積極的に自然とふれあいながら、遊び、学び、冒険心、創造性を育み、自然と接するマナーや感性を養う場を提供すると共に、四季を問わず豊かな自然にふれあうことで、憩い、やすらぎを享受できる空間とする」
- 整備の方向性として、「相模川の自然との共生を目指し、自然の一部を負荷の少ない方法で、一定の安全性を確保しつつ、遊び、学び、冒険心、創造性を育むことが出来るような整備」

とすることで、現在、具体的な整備内容の検討に移ってきています。なお、整備計画・設計は、9月末を目途に策定して、その後、11月ごろから工事に移る予定となっています。

「平塚市水辺の楽校」は、まだ動き始めたばかりです。将来に向けては、水辺の楽校を支えていくため、これら自然体験の方法や運営の仕組みづくり等、運営母体の整備なども重要となってきます。この水辺の楽校で、子供たちが新たな発見をしたときの歓声や笑顔、これらを支える大人たちの笑顔などが、いつもあふれるような場となるよう、これからもがんばっていききたいと思います。

（建設省京浜工事事務所／平塚市水辺の楽校推進協議会・WGメンバー）



「水辺の楽校」・会議風景



「水辺の楽校」・現地観察会風景



## 相模川紀行

# 相模川の橋脚跡

相模川と東海道とが交差する国道1号線の馬入橋から東へ約1.5kmばかり進んだ茅ヶ崎市下町屋に『旧相模川橋脚』がのこされています。

この橋脚は、大正12年9月1日の関東大震災及び翌年1月15日の再度にわたる地震によって、土中からむくむくと出現したものです。地上に露出した部分は約1.2m、長いものは2mにも達しています。杭は直径60cmほどの檜材で、その数は全部で11本。橋幅を類推すると7m余ではないかといわれています。

大正15年に国の史跡として指定されたこの橋脚跡は、吾妻鏡（東鑑＝鎌倉幕府の事績を記録したもの）によると、建久9年（1198年）に源頼朝の家臣である稲毛三郎重成が亡妻供養のために相模川に架橋した橋柱だそうです。

建久6年3月、稲毛重成が頼朝に従って上洛し、その鎌倉帰還の途にあった6月28日美濃国（岐阜県）青賀野に至って妻の危篤を報ずる飛脚に接した。重成は、頼朝の恩情による駿馬「黒」に乗り、東海道をひた走って馳せること3日、7月1日に武蔵国稲毛の郷に着き、妻の臨終にはまにあったが4日に他界してしまった。彼は悲嘆にくれ、頼朝の許しを得て入道し、妻の菩提を弔うほどの愛妻家であった。そして、帰途難渋した相模川の架橋を思い立ち、建久9年12月2日、将軍頼朝が臨席して開橋式を挙げた。ところがこのとき、頼朝公が乗馬もろとも川の中に落ちてしまい、それがもつて40日後の正治元年（1199年）1月13日に没してしまった。

この落馬事件から相模川下流一帯を馬入川と呼ぶようになったと言いはれていますが、一方では埴生（はにゅう＝粘土のある土地という意味）が転訛したものであろうという説もあります。

ところで、稲毛重成がせっかく架けた橋もすぐに流失してしまったようです。古来、相模川の歴史は氾濫の歴史でもありますし、いかに当時の土木技術をもってしても、自然の猛威の前にあえなく屈してしまったことが容易に想像できます。

鎌倉幕府の第3代将軍源実朝は、『相模川という川あり 日さし出でし後 舟に乗りて渡るとて、夕日さすや川瀬のみなれ草 なれてもうとき波の音かな』と詠じています。

このことは、実朝の時代には橋がなくなってしまっていたのが、それとも用をなさなくなっていたことを示していると思います。

江戸初期の著名な儒学者である林羅山が、相模川渡河のおりに詠じた漢詩の中に『昔絶長橋今有舟』と表現していますが、『昔は長い橋があったが、今は舟が有るだけになっている』と吟じているところに妙に哀愁めいた感じを受けます。

ともあれ、橋が完成した建久9年から大正12年に至る725年間もの長い間、土の中に埋没していた橋脚を見てもみるのも一興かと思います。暇がありましたらぜひ、訪ねてみてはいかがでしょうか。きっと昔の有様が偲ばれることでしょう。

(S)





## 湘南地域協議会が発足

### 地域の特性を活かした事業を展開

このたび、桂川・相模川流域協議会のなかに、地域の実情に応じたきめ細かな活動を行うことを目的として、下流域の協議会を平成12年4月に発足しました。正式な名称は「桂川・相模川流域協議会 湘南地域協議会（会長代行 赤羽興三郎）」とし、平塚市・茅ヶ崎市・寒川町を中心に活動を開始します。事務局は神奈川県湘南地区行政センターの環境保全課にお願いすることになりました。これにより、桂川・相模川流域には上流部の「桂川・北都留地域協議会」に続き、二つめの地域協議会が誕生したことになります。

湘南地域協議会では当面の活動目標として、建設省が平塚地域の河川敷に整備しようとしている『水辺の楽校（子供が水辺で自然体験できる）』づくりに協力し、自然重視型の施設となるよう積極的に働きかけていくこととしています。また、本年度の主要事業として、11月23日には、寒川町を会場として「流域シンポジウム 清く豊かに川は流れる」を流域協議会と共に開催します。

会長代行 赤羽興三郎

### お知らせ

この秋は、流域シンポジウムに参加しませんか

### 清く豊かに川は流れる

—飲み水から桂川・相模川流域を考える—

飲み水の安全性、水質の変化による生物の移り変わりなど、学識者を交えてみんなで考えてみましょう。

日時：11月23日（木・祝日）

10：30～16：00

会場：寒川町民センター

主催：桂川・相模川流域協議会

### あなたも入会しませんか！

★市民会費：個人会員 一口1,000円（一口以上）  
なお、団体として加入される会員の方は、一口2,000円をお願いします。

★事業者会費：一口10,000円（一口以上）

<振込先>

郵便振替：振込口座 00220-5-10259  
名 義 桂川・相模川流域協議会  
銀行振込：振込口座 さくら銀行横浜支店  
普通預金 6825559  
名 義 桂川・相模川流域協議会  
代表幹事 桑垣美和子

### 編 集 後 記

- ◆いまの若いママの4人に3人は、自分の赤ちゃんを笑わせられないとか。こわ〜いことです。ママは是非お子さんと一緒に近くの野遊びや川遊びにお出かけ下さい。ニコリ笑うようになること請け合います。(A)
- ◆海でうまれた命。文明は河の恵により水辺に花開いた。が、科学の発達は汚染物質を河から海へ。1年で河と海を往復する船。河は、その小さな命すら自然に育む力を奪われている。編集委員の醍醐味は、テーマと依頼先???あじえんだつくりませんか。(K)
- ◆生活雑排水が出るところで綺麗にする浄化槽の話を書きました。各家庭が水源になる発想は素敵だと思いました。厚生省の浄化槽法の改正ともあいまって、高性能併処理浄化槽の広い普及が良好な水環境への早道かも…。(N)
- ◆最近、水系こそ違いますが神奈川県内を流れる河川に高濃度のダイオキシンが流出して大きな問題となった。発生源とされた某工場では、もともと環境汚染防止装置のメーカーであるだけにイメージダウンは免れない。新聞やテレビなどのマスメディアによって連日のように報道され、市民や漁業関係者の関心も高い。ちょっとしたミスや点検の甘さが大きな社会問題になることを実証したケースとして記憶に留めたい。(S)

\*\*\*\*\*

<表紙の写真> 画 三代安藤広重 版 山清  
東海道中名所の一つと数えられた「馬入川の渡し」は、明治11年（1176）に木橋が架橋されるまで、長い渡船の歴史があった。この版画にある渡しの風景は、架橋前の明治初年の新旧入り交じった風俗が活写されている。

あじえんだ113

No.5（2000.9.1発行）

発行 桂川・相模川流域協議会

編集 あじえんだ113編集委員会

事務局 山梨県森林環境部環境活動推進課  
神奈川県環境農政部大気水質課

〒400-8501 甲府市丸の内1-6-1  
〒231-8588 横浜市中区日本大通1

TEL(055)223-1503 FAX(055)223-1507  
TEL(045)210-1111 内4128 FAX(045)210-8846

（この冊子は再生紙を使用しています）